



《このページの原典》

『花江都歌舞妓年代記（はなのえど かぶきねんだいき）』

巻之一・初編二 烏亭焉馬 著、松高斎春亭 画

天保12年・1841年刊（国立国会図書館所蔵）

うゐらう賣のせりふ

市川團十郎

（原典に基づく旧字旧仮名遣い）

拙者親方と申すは。お立合の中に。御存のお方もござりませうが。お江戸を立て  
にじりかみがた。さうしうおだわら。いつ。まち。あおもてう。のぼ。い  
二十里上方。相州小田原。一しき町をおすぎなされて。青物町を登りへお出でな  
さるれば。欄干橋虎屋藤右衛門。只今は剃髪いたして。圓齋となりまする。  
元朝より大晦日まで。御手に入ます此薬は。昔ちんの国の唐人。うゐらうと  
いふ人。わが朝へ来り帝へ参内の折から。此薬を深く籠置。用ゆる時は一粒づゝ。  
冠のすき間より取出す。依て其名を帝より。透頂香と給はる。即文字にはい  
たゞきすく香と書てとうちんかうと申す。只今は此薬殊の外世上に弘り。ほ  
う／＼に似看板を出し。イヤおだはらの灰俵のさん俵の炭俵のと。いろ／  
＼に申せども。平がなをもつてうゐらうと致たは。親方ゑん齋ばかり。もしや  
お立合の内に。熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるゝか。又は伊勢御参宮の折から  
は必ず。門ちがひいなされますな御登ならば右の方。お下なれば左側八方か



し。ゆんべもこぼして又こぼした。たあふぼゝたあふぼゝちりから／＼つつたつ  
ぼ。たぼ／＼干だこ落たら煮てくを。にても焼いても喰れぬ物は五徳鐵きうかな  
熊どうじに石熊石持虎熊虎きす中にもとうじの羅生門には。茨木童子が。うで栗  
五合つかんでおむしやるかの頼光のひぎ元去ず。鮎きんかん椎茸定めてごだん  
なそば切そうめん。うどんかぐどんなこ新發知小棚のこ下に小桶にこみそがこ有  
ぞ。こ杓子こもつて。こすくてこよこせおつとかてんだ心得たんぽの川崎。かな  
川程がや。とつかははしつて行ばやいとを摺むく三里ばかりかふち沢平塚大磯が  
しや小磯の宿を七ツおきして早天さう／＼相州小田原とうちん香隠れござらぬ  
貴賤群衆の花のお江戸の花うゐらう。あれあの花を見てお心をおやわらぎやつと  
いふ。産子這子に至るまで此うゐらうの御評判御ぞんじないとは申されまい／＼  
つぶり角出せ棒だせぼう／＼まゆに。うす杵すりばちばち／＼ぐわら／＼／＼と。  
はめを弛して今日御出の何茂様に。上ねば成ぬ賣ねばならぬと。息せい引ぱり  
とうほうせかい くすり もと やくしによらい しやうらん  
東方世界の薬の元々め薬師如來も上覽あれと。ホ、敬て。うゐらうはいらつ  
しやりませぬか。

● この当時の文書には句読点は使われず、原典に書かれている「。」は、息継ぎのための区切り点と思われます。ここでは、句点、読点の区別をせずに原典に沿って「。」のみを表記しました。

● 一ページ本文六行目の『透頂香』は、原典では『頂透香』と表記されていますが、これは誤記ではないかと思われるため、ここでは、正しい表記の『透頂香』としました。

● 「菊栗、むぎごみ」の下りは、菊栗の「六」と、むぎごみの「三」が欠落しているのではないかと思われますが、ここでは原典のままの表記としました。

● 「誰長長刀ぞ」の下りは、「誰長長刀ぞ」であると思われますが、ここでは原典のままの表記としました。

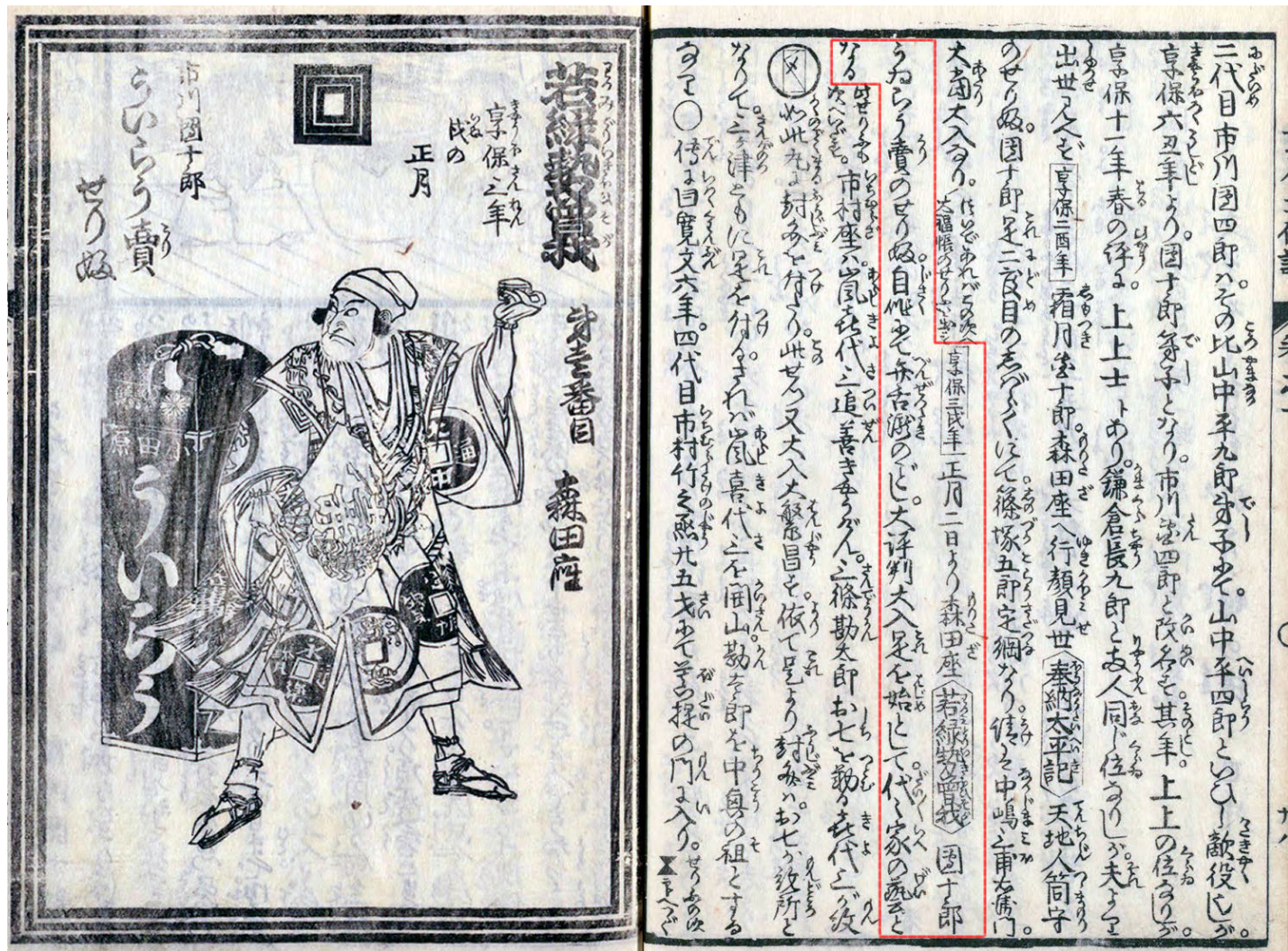
『花江都歌舞妓年代記』（はなのえど かぶきねんだいき） 卷之一

烏亭焉馬（うていえんば）著 天保十二年・1841年刊（国立国会図書館蔵）  
 ・享保三年・1718年に関する記述

享保三戊年 正月二日より 森田座

『若緑勢會我（わかみどりいきおいそが）』

團十郎 ういろう売のせりふ。自作にて弁舌瀧のべとし。  
 大評判 大入り。これを始めとして、代々、家の芸となる。



・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・いろいろ売りのせりふ」（1／3）

うならつ賣のせりぬ  
市川國十郎

杜老親方と申は、此合の中に仕合のお方もござりはせう。  
かゝい方を立て二十里上方に別小田原一志村をもちておられ。  
も物所を出し入お出なさるれ。欄干橋虎面を備へ只今、  
利便にてお出さるのにはどうぞ先知より天海まで御座  
ふ入する此等六昔ちへの國の唐人ならんものぞ入る給へ  
身り帝会事因の折らけは、是とほく筆を用ゆる時之粒  
冠のそえある取主を依て名を帝より頂受番とまわす。  
別々においでなれど書と書してうちんとすべし。只今分は  
猶の世上はひびきやうぐお似看振を出し、イヤとやられば儀の  
さ儀の候儀のことく中世も半かななりてうならんや  
故に軒方を多難なり。臣やおま合の内は勢海城の邊へ  
湯治もお出なさる。又ハ候勢は東宮の折らの必ぞ。門口へ  
まれしとるは仕合なる右の方。お下なれた側八方八棟  
ありてご立棟玉堂造とあるは、相のなられ、後を以救免  
有て素正なる者としむ。イヤ家系ありの家は、あんなくや  
やても、客の方に二ヶ月の期満の丸春白河松松さへ一粒  
たびて、そのまじき鎌倉をお目おをせう。先づ葉をかき、一粒古  
の上へおぼして腹内へ絶たせ、イヤとやらに入ねいん肺肝が  
すと、おおれて苦風咽とのす。口中より吐き出すうに魚  
も、木の子類敷の食合せ。それ外万病遠切あると神のじ  
叔父さまの二の妻おまの舌の早なるう、強いはらいて述る。  
ひいと舌の早のと。矢の權もあまらなや。そのやくへ  
さらちて、あらうては、あらうては、あらうては、あらうては、

\*このページの、本文七行目の「頂透香(とうちんこう)」は、「透頂香」の誤記ではないと思われるため、文字起こしでは「透頂香」としました。

・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・いろいろ売りのせりふ」（2／3）

かびはちんやまの二つ屋の将きわのら喪す。あかきなな  
そまやらわ。そこそこのものもよめた。さきへやるまや」を  
かきまゝ盆米ぼんごやう。摘蔘つと豆は三山林書字山の  
社傍らうちのちまま噓小米ののぬかさん小米はこいまかみ  
揚子しあめと揚子あめちん親めがき揚子もあき悲親うそい  
子赤へい子赤き情親うそん古栗の本けろ切は西ぐとぐん  
合羽うせ地のまやせんもは脚は我ホうまやせんもは御きあつ  
かき袴のあつちうびを。計をののちと後てゆふそちよ  
とあふむかたら極子地存存のら如きのくきまののく如きま  
むのらあまきすのお小佛。あげつまはまかな細溝おとちよ  
あようへ京のうま糖きまはうま糖とよと四五目。ちちや  
たちよ茶ちちよちちとなちよ茶なちよまき行茶家あうち茶  
ちやちちや。ちちくゆるする。高野の山けちけら小佛裡百  
足着きせん天目。いはば百やば具ものぐとぐとぐとぐ  
む。合せてまき馬具とまき。栗まきつとまき栗  
合せてまきとまき。あめかけの長がだめいけまきぞか  
そ向あめまきかかあめ明麻うそい。あつちやわんそやんの  
ま明麻売が。ひいて風車ちまやがわんぞ。ちまやがわんぞ。  
あんさもあやて又とやて。あわ。あ。た何。あ。やちのかちく  
はんろ月。た。ち。丁だこ屋さ考てを。あ。ての焼ても喰  
まねわん五種漢まき。かな然どじ。あ。石然。石持虎然虎ま  
中にもどじの海生。あ。茂木まき子う。う。栗五合はくんで  
あ。い。あ。かの親先のひざえ去そ。鮎まきうん推草定めて。た。今  
そは切ちちちんぐとん。な。こ親愛。知小柳のこ。下。に小桶あ

\*このページの、後ろから九行目の「長長刀(なかなき)」は、「長長刀(なかなぎなた)」ではないかと思われますが、文字起こしでは、原典のままの表記としました。

## 《資料二》

・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・いろいろ売りのせりふ」（3／3）

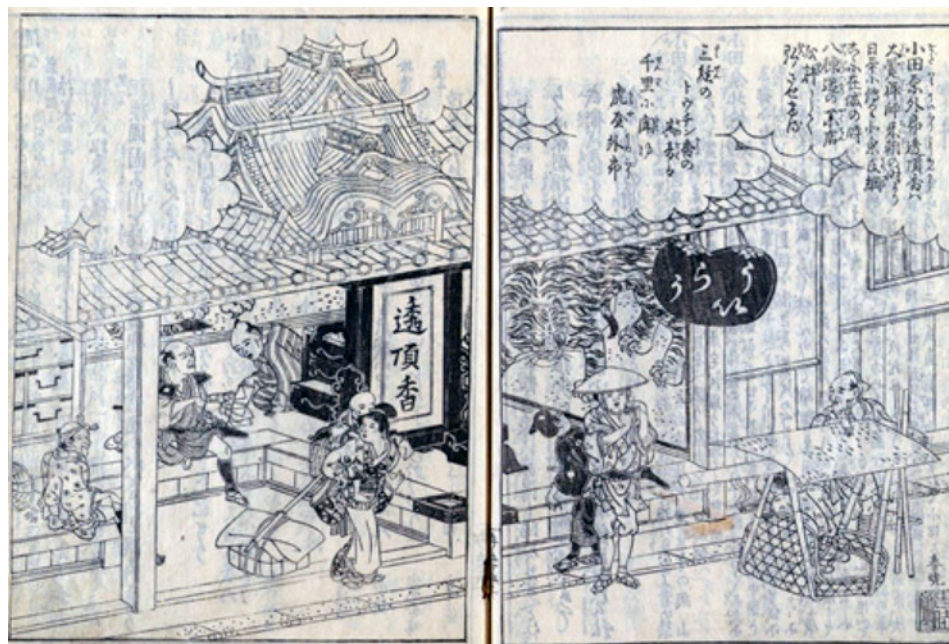
こみぞうとてそと投子ころつて。こぞてこよとせあつたかてんぞ  
ぬねたんやの川邊がな川短や。さうふどいつて行む女のと成指  
ひくし里をりうち平塚文蔵じや小磯の宿をせちぢやて  
早天まろく相別小田永さうち人香隠れさきめ姓那末の  
氣のお江戸のむらならう。ゆれの都をえとおいへちやくきふたと  
ゐる春子遣子お至るまで此方ならう北沢新田にいでゐるとや  
されまひくはざり角せ棒せやうくまふあうと許どりもち  
むちくぐらんとと。ためだ弛て今日出ぬのめ後戻ふよねハ成  
ねま後であらねと島せいにもり東方世界のすまの元々葉師  
ぬまり上流われと。散てうならういらつてきの手合せぬ。



名取春仙画  
『似顔畫集-創作版畫[2] 第十五』  
外郎賣 市川三升  
大正14年-昭和2年・1925-1927年  
(国立国会図書館所蔵)

2016年(平成28年)2月  
2008年版改訂  
みんなの知識 ちょっと便利帳

「外郎売・ういろ売り」は、  
享保三年・1718年正月二日から、  
二代目市川團十郎によって江戸・森田座で上演された『若緑勢會我（わかみどりいきおいそが）』の中の台詞。  
團十郎の自作で、『弁舌瀧のごとし。大評判で大入り』であったとされ、これ以降、成田屋の家の代々の芸となり、歌舞伎十八番（かぶきじゅうはちばん）の演目の一つとなった。  
歌舞伎十八番は、成田屋の家の芸の集大成で、七代目團十郎が「市川流」の「歌舞妓狂言組十八番」の制定を公表したのは、天保三年・1832年三月の市村座。



『東海道名所圖會』 寛政9年・1797年 (国立国会図書館所蔵)



豊国画  
『歌舞伎十八番 外郎』  
「虎屋東吉 九世市川團十郎」  
嘉永5年・1852年  
(国立国会図書館所蔵)